



| | |
|------------------------|---|
| Title | 一人称研究から考察するNFT市場における新たな芸術的価値 [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 布川, 雅子 |
| Citation | 北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第15618号 |
| Issue Date | 2023-09-25 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/90901 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | theses (doctoral - abstract and summary of review) |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL. |
| File Information | Masako_Nunokawa_review.pdf (審査の要旨) |



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：布川 雅子

| | | | | |
|------|----|-----|----|----|
| 審査委員 | 主査 | 准教授 | 藤野 | 陽平 |
| | 副査 | 教授 | 西村 | 龍一 |
| | 副査 | 准教授 | 田邊 | 鉄 |
| | 副査 | 准教授 | 上田 | 裕文 |

学位論文題名

一人称研究から考察する NFT 市場における新たな芸術的価値

審査は7月27日（木）14:45より、学院407室において公開で実施された。

はじめに著者から論文について説明があり、その後審査員から質疑応答およびコメントの提示があった。

本論文は、ブロックチェーンを用いた非代替性トークン（NFT）を美術作品の流通に用いる、NFT アートの可能性や限界を、一人称研究によって明らかにしようとする試みである。

審査員の見解は以下の通り。

本研究は、単に目新しいというだけではなく、暗号資産、NFT という最先端のメディア技術・メディア状況を扱い、メディアや技術とアートの新しい関係を明らかにしようとした試みは、これまでのアート研究にはない独自性がある。NFT アートや生成型 AI 等についてインフォーマティブであり、当該分野の先進的な研究として、高く評価される。

特に、一人称研究という、新しい研究方法によって研究者の新しい立場を拓き、外でも内でもない「わたし」が、実際に NFT アート市場に参入することで、海の物とも山の物とも判然としない最先端技術を、体験的に明らかにしていく、という研究のアイデアは、進化のスピードによって特徴づけられている NFT のような先端技術を、社会科学・人文科学的文脈で捉えようとするとき、非常に大きな示唆となるだろう。厳しい事態に遭っても、関係者と「当事者同士」ならではのリアルな関係を取り結んで、一つ一つ謎を解き明かしていく、サスペンスにあふれた分厚い記述がそれを裏打ちしている。

本論文は、単なる美術論ではなく、「社会における芸術的価値」「権威」「アーティストの自律」「アートを巡るコミュニケーション」の4つの問題が複雑に

絡み合う中から、その関係を明らかにしようとしている。ただ、ちょっとこれは欲張りに過ぎたように思う。一部の議論が消化不良気味になり、やや物足りない感じを与える。たとえば、宗教画と権威について、美術史を丁寧になぞっているにもかかわらず、メディアと宗教というテーマで必ず話題になる、印刷テクノロジーの進化は言及していない。

また、第7章の、一人称研究の結果の分析から、結論部分にあたる第10章「仮説の生成」までの間に、8章・9章という細かな検証が入っていることから、7章までの一人称研究の内容の、一人称研究の目的である第10章への貢献がわかりにくくなっている。これは構成の欠陥と言えるだろう。

質疑応答の中で、アフェクト、美術館の中に満ちる創作のパワー、といった情動的・情緒的要素を、学術論文として十分に証明できるのか、という議論があった。それについて著者は、アートとは自律的に伝わるものであり、また、それを明らかにするための一人称研究である、と回答した。本研究が、学術研究としては扱いにくい分野の研究に、示唆を与えるものであることが期待される。

その他、若干の誤字脱字および一部引用の不備が指摘された。

以上、本論文は、最先端技術がアート市場にもたらしたインパクトを明らかにし、技術と芸術の関係、価値と権威の関係等の議論に、理論的かつ実証的に貢献しており、いささかの瑕疵、改善の余地はあるが、北海道大学において博士の学位を授与されるのに十分な業績であると審査員全員が一致して判断した。